

令和元年度博士学位論文要旨

## 中国の金融制度改革と中国商業銀行のリスク管理

馮 萌 芸\*

### 要 旨

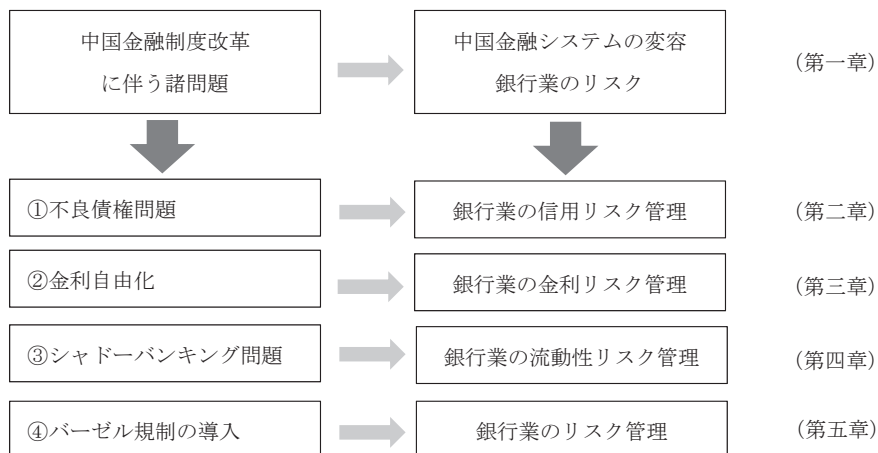
2010年に中国はGDPの規模で世界第2位の経済大国に躍進したが、その2年前に表面化したリーマンショックの影響を受け、経済成長率が急速に鈍化することになる。2010年代に入って中国の金融改革は金融の自由化、資本取引の規制緩和、債券市場の発展、民間資本の活用、預金保険制度の導入、金融規制・監督体制の整備など幅広い課題を対象としてきた。特に金融自由化の柱としては、金利の自由化、業務の自由化、為替・資本取引の自由化が挙げられるが、日本の金融システム改革と比べて、20年から30年遅れていると言われる。

本論文は、上で述べた中国における金融システム改革の中から主要な課題を取り上げ、それに伴う金融リスクの形態やそれらに対応する各

種の金融リスク管理の方法、管理体制のあり方などについて総合的に研究したものである。

本論文は5章で構成され、各章の関係は以下のように示される(下図、参照)。

第一章の「中国金融システムの変遷と金融制度改革に伴う諸問題」では、まず、中国の金融制度改革のこれまでの流れについて概観した。これまで中国の金融制度改革は銀行中心に進められてきた。中国人民銀行は、1949年の中華人民共和国(以下、中国)の建国に先立ち1948年12月に国家銀行として設立された。1978年からの改革開放政策の下で、4つの国家専門銀行が順次設立された。1984年以降、深圳発展銀行、広東発展銀行、上海浦東発展銀行などの株式制商業銀行が設立され、中国における商業銀行は地域に広がった。1995年には「中国人民銀行法」が成立し、中国人民銀行が中央銀行であること



\* 広島経済大学大学院経済学研究科博士課程後期課程2019年度修士

が法律においても規定された。次に、金融監督管理体制、金融市場と金融リスクを取り上げた。金融監督管理体制は、2018年、金融業務の複雑化や金融機関の相互進出などにより、「一行两会」の形に変更された。金融市場は短期金融市場、資本市場と外国為替市場に分類し、短期金融市場はさらにコール市場、レポ市場と手形市場に分類することができる。一般に銀行業が直面するリスクには信用リスク、金利リスク、流動性リスクなどがある。この章では中国の金融制度改革に伴う諸問題を示し、その下での中国商業銀行のリスク管理の位置づけを行った。

第二章の「中国商業銀行の不良債権問題と信用リスク管理」では、まず、中国商業銀行の不良債権問題とその処理方法について検討した。2008年のリーマンショックの影響により中国の経済は大きく減速した。その際、中国政府は4兆元の景気政策を実行し、銀行の貸出総額も増加した。その結果、2009年から2013年まで不良債権比率は減少傾向にあったが、2014年から過剰投資による不良債権問題が再び顕在化してきた。次に、不良債権処理の前提となる中国商業銀行の信用リスク管理の現状について明らかにした。三浦（2017）によると、信用リスクの高いセクターへの資金供給が集中していると指摘している。したがって、中国の経済構造改革が進むと不良債権問題がもっと深刻になる可能性もあり、中国商業銀行において不良債権の増加に伴い信用リスク管理にこれまで以上に注意を払うべきであると考ええる。さらに、日本の銀行業の信用リスク管理の進展について説明し、最後に日本の銀行の信用リスク管理と対比しながら中国の銀行が今後どのように信用リスク管理をしていけばよいのかを検討した。

第三章の「中国の金利自由化と中国商業銀行の金利リスク管理」では、まず、中国の金利自由化の経緯とその課題について検討した。中国の金利自由化の経緯について主に預金金利と貸

出金利の自由化の点から概観した。貸出金利の下限規制は2013年7月に撤廃され、預金金利の上限規制は2015年10月に撤廃された。このように銀行金利は原則自由化されたものの、預金金利については依然として窓口指導によって大幅に制限されている。この金利自由化の進展に伴い、預金に代替する金融商品の整備など中国政府や金融当局が克服すべき課題も多く存在する。次に、銀行の金利リスク管理とその計測手法について説明した。金利自由化に伴って、銀行にとって最も重要な課題となるのは、リスクの変動に対する対策である。ここではその一般的な金利リスク管理と計測手法について示した。計測手法については経済価値ベースと期間損益ベースの2つの視点から検討した。続いて日本の金利自由化と日本の銀行業の金利リスク管理について検討し、最後に日本の銀行の金利リスク管理手法を参考にして、中国の銀行業の今後の金利リスク管理のあり方について考察した。

第四章の「中国のシャドーバンキングと中国商業銀行の流動性リスク管理」では、まず、中国のシャドーバンキングの現状と銀行の金融リスクについて取り上げた。中国政府はリーマンショック後、財政・金融政策を大幅に緩和した。しかし、2009年金融緩和の行き過ぎが懸念され始め、2010年から利上げや預金準備率引き上げを実施、並行して預貸比率規制を厳格に適用した。一方、地方政府プロジェクトや不動産開発の資金重要は依然として強かったため、銀行側は規制を回避しながら「融資」を続ける動きをした。その際、情報開示不足などで問題となるシャドーバンキングが金融リスクを潜在化させていることを明らかにした。次に、銀行流動性理論について伝統的な銀行流動性理論と最近の銀行流動性モデルを紹介している。前者では川口慎二（1961）に基づき銀行流動性の決定要因を説明し、後者は丸茂（2013）の資金回収モデル、Brunnnermeier and Oehmke（2010）の

「レボ取付け」モデルでは、市場で流動性リスクが拡大し、金融危機が発生することを示している。さらに日本、欧州の銀行における流動性リスク管理の方法と特徴について整理した。2008年9月のリーマン・ブラザーズの破綻に端を発した金融危機を契機に金融システムの安定化は国際的な政策的課題となったが、ここでは、具体的にデンマークの大手銀行であるダンスク銀行の流動性リスク管理体制を検討した。最後に中国商業銀行の流動性リスク管理の方法と特徴を分析して、中国商業銀行が今後どのように流動性リスクを管理するかを考察した。

第五章の「バーゼル規制の導入と中国商業銀行のリスク管理」では、まず、バーゼル規制の変遷について考察した。1974年ドイツのヘルシュタット銀行が破綻し、それにより国際的な金融システム不安が引き起こされた。国際的な通貨決済に係るリスクが認識されて以降、自国の銀行ばかりではなく国際的な金融システムの安定性維持の問題意識が高まった。1975年国際決済銀行内に銀行監督のためのバーゼル銀行規制監督委員会が発足した。次にバーゼルⅢの導入と銀行のリスク管理を検討した。ここではまず、銀行のリスクとバーゼルⅢの関係について説明した。さらに日本版バーゼルⅢと日本の銀行のリスク管理について検討した。バーゼル規制は各国の法律により制度化され、運用されていくこととなる。最後に中国版バーゼルⅢと中国商業銀行のリスク管理を明らかにし、中国商業銀行が今後どのように対応するかを考察した。また、バーゼルⅢの下で自己資本比率規制の強化や流動性規制の導入が行われたが、日本及び中国の銀行業において、自己資本比率規制の達成度や流動性比率の達成度について、時系列データを用いて分析した。特に銀行の2008年～2018年の統計データを用いて、日本のメガバンクと地方銀行の自己資本比率の達成状況、および中国の5大国有商業銀行と株式制商業銀行の

自己資本比率規制、流動性比率の達成状況について分析した。

最後の終章では、本研究のまとめと残された今後の課題について触れている。第一章では、中国の金融制度改革のこれまでの流れを整理し、金融監督管理体制、金融市場と金融リスクについて取り上げた。また中国の金融制度改革に伴う諸問題について検討した。第二章では、まず中国商業銀行の不良債権問題とその処理方法について説明し、不良債権処理の前提となる中国商業銀行の信用リスク管理の現状を考察した上で、日本の銀行業の信用リスク管理の進展をについて説明し、中国商業銀行は対比しながら今後どのように信用リスク管理を実行していけばよいのかを考察した。第三章では、日本の金利自由化と日本の銀行業の金利リスク管理について考察し、最後に日本の銀行の金利リスク管理手法を参考に、中国の銀行の今後の金利リスク管理のあり方について検討した。具体的には、リスク測定上の問題、金利リスク管理に関する商業銀行の経営陣の意識の遅れ、金利リスクの管理組織と専門の人材の不足、中国金融市場の未発達さと金利リスク計測の弱さ、金融商品の価格を決定するメカニズムの問題の5つ課題について考察した。第四章では、中国のシャドーバンキングの現状と銀行の金融リスクについて取り上げて、シャドーバンキングと深い関わりを持っている銀行の流動性リスクについて注目した。続いて、銀行の流動性の一般的な理論について説明し、日本・欧州の銀行についての流動性リスク管理の方法と特徴について検討した。最後に中国商業銀行の流動性リスク管理の方法と管理の指標を分析して、中国商業銀行が今後どのように流動性リスクを管理するかを考察した。第五章では、まずバーゼル規制の変遷を踏まえ、バーゼル規制と銀行のリスク管理の関係を検討した。次に、日本版バーゼルⅢの達成状況と日本の銀行のリスク管理について考察し、

続いて中国版バーゼルⅢの達成状況と今後中国商業銀行のリスク管理について検討した。

今後の課題として、まず第1に、本研究では、中国商業銀行の金融リスク管理の課題と今後の方向性を考察するに当たり、中国国内で公表されている文献や資料、データを中心に使用してきたが、得られた資料は十分ではなかった。今後、たとえば金融機関へのヒアリング等を行うことで、より中国銀行業の金融リスク管理の実態が捉えられると考える。第2に、進展する人民元の国際化による中国商業銀行の為替リスク管理についても研究の対象にする必要がある。近年中国では、グローバル金融危機以降、人民元の国際化が国家戦略として推進されている。その戦略の中心となっているのは、貿易取引における人民元建て決済の拡大である。また人民元建ては資本取引の自由化とも関係がある。こうした資本取引の自由化の進展によって為替レートの変動の問題が生じてくる。したがってこの点からも、中国商業銀行の為替リスク管理

の問題を考察することが必要であると考え。第3に、G20のコミットメントの下でバーゼルⅢが段階的に適用されようとしている中で、バーゼル委員会はバーゼルⅢに含まれていない新たな改革を進めようとしている。それはバーゼル3.5またはバーゼルⅣなどとも呼ばれるが、これらへの対応として中国商業銀行の金融リスク管理を再検討する必要があると考えられる。第4に、中国の地方商業銀行の金融リスク管理の実態を実証的に研究することにも関心を持っている。

## 引用文献

- Brunnermeier, M. and Oehmke, M. (2010) "The Maturity Rat Race", *Journal of Finance*, Vol. 68, No. 2, pp. 483-521
- 川口慎二 (1961) 『銀行流動性論』千倉書房
- 丸茂俊彦 (2013) 「影の銀行と資金流動性リスク」『社会科学』第42巻, 第2号, pp. 27-46
- 三浦祐介 (2017) 「中国における金融リスクの動向—高まる信用リスクと複雑化するシャドーバンキング」『みずほインサイト』みずほ総合研究所, pp. 1-10